

## アリストテレス『形而上学』Z巻第10・11章における本質としての形相

桑原 司(上智大学)

本発表の目的は、アリストテレスが『形而上学』Z巻第10・11章において、質料を本質としての形相から区別することを通じて、形相の特徴をも間接的に浮かび上がらせようとしていた、という解釈を提示することである。

アリストテレスが同箇所論じている問題の一つとして、質料・形相の結合体の部分のうち、どの部分が形相としての部分で、どの部分が質料としての部分なのか、というものがある。このような問題が出てくるのは、定義の対象である本質としての形相を質料からはっきりと区別できないと、定義が不可能になるためであるとされる。

そこで、アリストテレスは当該箇所、質料を本質としての形相から区別する論拠として、次のようなものを提示している。

- (1) 現に特定の種類の質料によって構成されている結合体は、別種の質料によっても構成されたと想定することは可能であるため。
- (2) 質料は結合体の崩壊・消滅後にも残存することができるため。
- (3) 質料はそれ自体では知られないため。

(1)を言い換えれば、ある種類の質料において実現されている形相は、別種の質料においても実現されうる。例えば、球の形相は、青銅においてだけでなく、石においても実現されうるということは容易に想定できる。そのために、球の本質としての形相を、それが実現されうる様々な質料から区別することができる、というわけである。確かに球の形相はそれが結合体において実現されるために質料を必要とするが、だからといって球の本質的なあり方にとって、特定の質料で構成されていることは必須ではない。

しかし、交換可能性を容易に想定できない事例がある。それは、例えば、肉や骨から構成されている人間のよう、現に特定の種類の質料以外からは構成されていない結合体である。そのため、この場合には、どうしても別種の質料から構成されたと想定することが難しくなる。だが、アリストテレスはこのような事例においても、質料を形相から区別するために(2)を用いることができる。すなわち、人間は死ぬと肉と骨になってしまうため、人間の形相とその質料である肉と骨を区別することができる、というわけである(以上の(1)・(2)に関しては、Devereux 2011 およびCode 2011を参照する)。

(3)が述べているのは、結合体の質料についてまったく知ることができないということではなく(現に我々は人間が肉と骨という質料から構成されていることを知っている)、質料が形相との関係で知られるということである。すなわち、質料は、ある特定の形相を持った結合体の質料として、すなわち、ある特定の形相がそこにおいて実現される場所のものとして、同定されるのである。例えば、青銅が何らかの質料であるのは、それが球の質料として、球の形相がそこにおいて実現される質料として、である。

これら三つは確かに質料に帰せられる特徴ではあるが、質料を形相から区別する特徴となっている限りでは、形相の特徴も間接的に浮かびあがりにもいるだろう。

(1)から、ある結合体の質料が別種のもので置き換えるがゆえに形相から区別されるのであれば、形相は別種のもので置き換えることはできない、ということになるだろう。例えば結合体としての球が球であるためには、青銅や石などの特定の質料で構成されている必要はないが、球の形相によって規定されている必要はある。その意味で、形相は結合体の共時的なあり方にとって欠くことのできない部分である。

他方、(2)から、質料が結合体の崩壊後に残存するがゆえに形相から区別されるのであれば、当然ながら形相は結合体崩壊後に残存しないことになる。言い換えれば、形相は結合体の崩壊後、もはやその質料において実現されていない。形相が実現されなくなると、結合体は崩壊する。このことが示唆するのは、形相は結合体の崩壊まで、その結合体が特定の種類のものであり続けたことを通時的に規定している、ということである。

(3)から分かるのは、質料がある特定の形相との関係でしか知られないということであった。アリストテレスがこのような質料の持つ関係性と対比させるのは、結合体の本質としての形相を通じて知られ、語られるということである。このことから、結合体について知り、語るためには、質料は形相との関係で知られるため、その形相を把握する必要がある、ということが分かる。

Wedin 2000は、『形而上学』Z巻第10・11章の最大の目的を、質料からの「形相の純化(purification of form)」と特徴づけた。すなわち、形相と質料の区別を曖昧でない仕方で立てようとしているというわけである。とはいえ、以上のように、同箇所にはそれだけにとどまらない役割がある。同箇所は、第4～6章から続く本質論の締めくくり当たり、質料を形相から区別することを通じて、本質としての形相の特徴を間接的に浮かび上がらせるようともしていたのである。そのように論じる予定である。

### 参考文献

- Code, Alan 2011. "Commentary on Devereux". *Proceedings of the Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy* 26: 197-210.
- Devereux, Daniel 2011. "Aristotle on the Form and Definition of a Human Being: Definitions and Their Parts in *Metaphysics* Z 10 and 11". *Proceedings of the Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy* 26: 167-96.
- Wedin, Michael V. 2000. *Aristotle's Theory of Substance: The Categories and Metaphysics Zeta*. Oxford: Oxford University Press.